日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園１-11-15　日本教育会岩手県支部　TEL 019-623-8100　● 代表　八重樫　勝

愛と先へ
―まだ見ぬ景色を求めて―

岩手県中学校長会　会長　佐野　理
（盛岡市立上田中学校長）

季節は、冬を迎えようとしています。12月は師走と呼ばれ、師も走るぐらい忙しい月という意味で知られておりますが、師は誰なのかは諸説があるようです。仮に我々学校に勤務するものとするならば、年中忙しい毎日を送っていることを考えるとあまり実感が湧かないのは私だけでしょうか。

さて、私事ですが好きな季節は夏であります。夏の風物詩と言えば高校野球。新型コロナウイルス感染症が確認されて3年目となり3年生はコロナ禍の中での学校生活を過ごしてきた世代ということになります。野球のみならず生活そのものに様々な制限がかかる中ひたむきに白球を追い続ける全国の高校球児の姿に感動し、たくさんの勇気をもらった人は少なくないと思います。そして、東北に住む者にとって待ちに待った瞬間が遂に訪れました。宮城県代表の仙台育英高校が全国の頂点に立ったのです。深紅の大優勝旗がついに「白河の関」を越えました。本県中学校出身者の活躍も喜ばしいことです。東北が一枚岩となり東日本大震災からの一日も早い復興を願い、一方で感染症拡大による新しい生活様式の中でも努力を惜しまなかったからこその快挙だと思います。そして何より心に響いたのは、須江航監督の試合後のインタビューでした。開口一番「宮城のみなさん、東北のみなさんおめでとうございます」続けて「青春って、とても密なので」そして「全国の高校生に拍手を」と話されました。何よりも先に東北に住む郷土の人たちへの祝福、「密」はだめだと言われ続ける中であきらめずに頑張った全国の高校生を讃えるフレーズに優しさと愛を感じました。同時に、まだ見ぬ景色を見たようでとても心が和んだインタビューでした。

本校は、生徒会スローガンをとても大切にしている学校です。今年度は「愛と先へ」と掲げ、まだ見ぬ景色を求めて「共に認めあい、新たな道を切り拓く学校」を目指し、教職員と生徒が一丸となって頑張っています。

今、学校教育においては、「令和の日本型学校教育の構築」「ＧＩＧＡスクール構想の実現」「働き方改革の推進」「部活動の地域移行」等が喫緊の課題です。特に、中学校教育においては、今後の部活動がどうなっていくのかは、極めて重要な問題です。教職員の働き方改革と子どもの多様なスポーツの機会の確保との両面について議論を深め、円滑に地域移行を進める必要があると考えます。一方で、校長には、これまで以上にリーダーシップとマネジメントを発揮し、新たな学校づくりが求められます。県校長会も、愛をもって先を見据え、まだ見ぬ景色を求め、新たな社会を形成する生徒の育成に力を尽くします。

令和４年度第47回全国教育大会鹿児島大会報告

大会主題「読み解き対話する力を育てる教育」

岩手大学教育学部附属中学校　平澤傑教諭が貴重な提言

各校の研究推進に大きな示唆

（公社）日本教育会主催の「令和４年度第47回全国教育大会鹿児島大会」は10月29日（土）午前10時から、鹿児島市内のホテルで開催され、参加した佐々木真氏（盛岡市立津志田小校長）と高橋ひさ子副支部長から大会の様子を報告して頂きました。なお、岩手県支部からは15名の会員がオンライン参加をしています。

会場のSHIROYAMA HOTEL

◆開会行事

オンラインでの参加者が２１７名、直接会場に集まったのは２２４名で、対面も含めた開催となったことに、会場には開催を待ち望んでいた多くの思いが溢れているように感じた。

鹿児島県には薩摩藩の時代から、「判断に迷う時は行動に移す」という教えがあるという。明治維新にも影響を与えたそうだ。実行委員長のあいさつの一部である。コロナ禍での開催に尽力された関係者へ感謝の思いが膨らんだ。

趣旨説明では、社会全体の教育力の向上に努める必要性が述べられた。各校種に加えて、地域社会からの提言が取り入れられていることは重要であると感じた。

開会行事を通して、昭和から平成そして令和へと脈々と開催されてきた本大会の意義を感じた。

◆６分野から提言

本大会も昨年度に引き続き、幼稚園・こども園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の各校種から、さらには家庭・地域社会と合わせて６つの提言が行われた。そのうちの２つはオンラインでの発表となった。

大会主題は「読み解き対話する力を育てる教育」であった。それに応じ各提言は、「言葉での伝え合い」、「体験と言葉の結びつき」、「協

開会式の様子

今後も研鑽と努力を！

岩手大学教育学部附属中学校

研究主任　平澤　傑

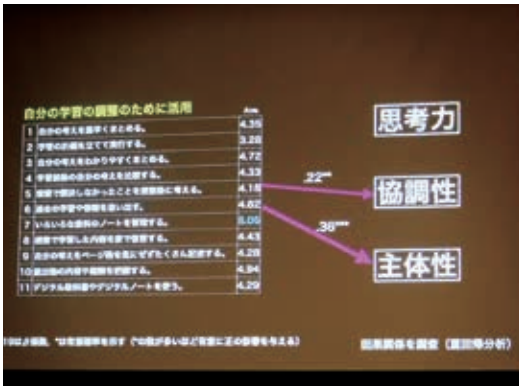
これまで本校職員と一丸となって取り組んできた実践・研究を全国の方々に発信する機会をいただけたこと、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。提言では、「校内研究のあり方」について述べさせていただきました。今後も本校では、「目指すべき生徒像を教職員で具体的に共有（目的・目標が明確な校内研究）」「目的に即した実践検討（実践内容ありきでない校内研究）」「教育効果の適切な検証（成果ばかりが掲載される研究紀要からの脱却）」を重視し、生徒の成長と地域・全国への発信を大切にして参ります。大会中は、他校種の提言者とお話させていただく機会がありました。その中で、「これからの教育は、ＩＣＴの発展と共に、益々自動化され地域格差が減っていく。我々教員には、さらに高度な専門性と人間だからこそできる質の高い教育が求められる。」という話題になりました。今後さらに研鑽と努力を重ねなければ、と意識が高まる機会となりました。

働学習」、「主体的な発表」、「自らの問い」、「外部人材」といった視点に基づいていた。

また、多くの提言では、「ヒト・モノ・コト」との関わりをもたせていく中で、児童生徒が主体的に思考したり実践したりするように手立てが講じられていた。ＩＣＴの実践も発表され、会場の参加者は大きな関心を向けているように思えた。

いずれの提言も児童生徒の変容を客観的に示し、成長の様子が具体的に把握できる素晴らしい内容であった。

提言する平澤傑教諭



関心が向けられた提言内容

◆平澤教諭の提言

平澤教諭の提言でまず感じたのは、目指す生徒の姿を共有し、それに向けて一丸となって取り組む職員集団の素晴らしさだった。また、生徒の実態や実践上の課題に立脚しながら、これからの社会に生きる児童生徒を育むうえで貴重な提言だと感じた。全国各校の研究推進に大きな示唆を与え得る提言であった。発表中、説明の画面を写す音が絶え間なく聞こえ、多くの関心が向けられていて本県から卓越した研究が発表されたことに感銘を覚えた。（写真と文・佐々木真（盛岡市立津志田小学校校長））

記念講演「歴史を学び、歴史を生かす」の感想

講師　株式会社島津興業取締役相談役　島津　公保氏

午後からは「歴史を学び　歴史を生かす」と題して、島津興業取締役相談役で、「薩摩ルネッサンス事業」を牽引している島津公保氏の記念講演が行われました。島津公保氏の父上は、第11代薩摩藩主島津斉彬の孫である島津家第30代忠重の三男に当たります。

穏やかな語り口で話されたのは、幕末に日本の近代化を推進した斉彬の集成館事業から始まり、世界史に類を見ないプロセスを物語る「明治日本の産業革命遺産」を２０１５年の世界文化遺産登録へ導くという時空を超えてつながる感動的な内容でした。

集成館事業の製鉄技術が大島高任を通して釜石の橋野鉄鉱山へと伝播したことを聞き、鹿児島と岩手のご縁を感じました。８県11市に渡る産業遺産はこれまでに例がなく、登録に向けてかなりの困難がありました。加藤康子氏の著書「世界遺産」に力をもらい、九州、全国、政府そして世界へと産業革命遺産の意味や価値を伝え続け、多くの人たちの協力と支援を戴き、実現できたと。斉彬が、仙厳園から桜島の先に続く世界を意識し、日本の未来を見据えたように、島津公保氏もまた、これまでにない産業遺産の新たな活用で世界を迎える展開をするのではないでしょうか。

講演の最後に鹿児島出身で長年にわたり交友のあった故稲盛和夫氏の言葉が紹介されました。

「ものごとを成し遂げるには三つの力がある。一つの自力と二つの他力。他力の一つ目は、周りの協力者の力、二つ目は、目に見えない力。天が助けたいと思うくらい努力を重ねること」と。

島津忠良（日新公）の詠んだ和歌「道にただ身をば捨てんと思いとれ、必ず天の助けあるべし」と重なります。日新公の「いろは歌」、「郷中教育」の根付く薩摩で育まれた精神文化の豊かさを感じるすばらしい講演会でした。

岩手県支部副支部長　高橋　ひさ子

講演する島津公保氏

地区会だより

岩手地区会

念願の研修会を開催

今年度、岩手地区会では7月26日（火）サンセール盛岡を会場にして、念願の総会・研修会を開催いたしました。3年ぶりの研修会には79名もの多くの参会者を迎え、演題「世界にはばたく岩手のアスリート」について、アルベールビル冬季五輪・スキー複合団体金メダリストの三ヶ田礼一氏にご講演をいただくことができました。ご存じのとおり三ヶ田氏は（公財）岩手県体育協会特別指導員として「スーパーキッズ事業」を担当され、現在は岩手県文化スポーツ部スポーツ振興課主幹兼特命課長として、選手の強化や人材の発掘、後進の指導にあたっておられます。ご講演では、パフォーマンススタンダード（身体的能力）とアスリートパフォーマンス（人間力）の2つを育てることが大切なことや、正しい姿勢がとても重要であること、さまざまなスポーツの経験がアスリートを育てるうえで土台づくりになることなど、学校教育の中でも大切にしなければならないことを教えていただきました。とても有意義な研修会になりました。

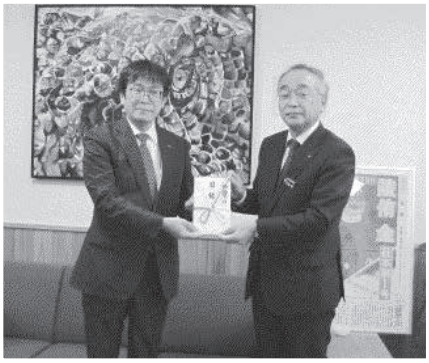
開催にあたってご支援いただきました日本教育会岩手県支部の皆様をはじめ、多数ご出席いただきました終身会員の皆様、地区校長会・副校長会の皆様、誠にありがとうございました。

（事務局長　藤野　高嗣）

岩手地区会研修会の様子

（一財）岩手県教育振興基金の公益事業
岩手育英奨学会へ二百三十五万円助成
新任校長・副校長先生方からのご寄附

今回で10回目となる（一財）岩手県教育振興基金（八重樫勝理事長）から（公財）岩手育英奨学会（遠藤洋一会長）への「育英奨学資金贈呈式」が、10月20日（木）午後1時から岩手県庁10階教育長室において行われました。最初に梅津久仁宏副理事長（盛岡一高校長）が「今年も県内の小・中・高・特別支援学校の新任の校長、副校長先生方から特別のご協力を頂いて、助成金を贈呈することが出来ました。経済的な理由から修学が困難な生徒に対し、学資を貸与し、社会に有用な多くの人材を育成することにご活用下さい」と挨拶。続いて、（公財）岩手育英奨学会常務理事の佐藤博県教育長に二百三十五万円の目録を贈呈しました。佐藤常務理事は「多額の温かいお志を頂き、深く感謝申し上げます。将来岩手を支える子どもたちのために有効に使わせて頂きます」と御礼の言葉を述べられました。この助成金交付は、（一財）岩手県教育振興基金の公益事業として行われるもので、県内の小・中・高・特別支援学校の今年度の新任の校長・副校長先生方、二百三十四人から、お一人1万円ずつの御寄附を頂き、それに（一財）岩手県教育振興基金から1万円を拠出して合計で二百三十五万円となったものです。なお、令和3年度は三百二十三名の高等学校在学生が、奨学生として、学業に励んでいます。


佐藤博教育長へ目録を贈呈する梅津副理事長

岩手県教育振興基金 寄附者御芳名（敬称略）

◇**小学校長会・中学校長会**

▼**盛岡地区**（4名）佐々木健一・及川崇
皆川晃宏・長畑滋彦

▼**岩手地区**（9名）髙橋司・君塚裕子
小林満・荒木田早月・熊谷明宏
高橋邦明・高橋眞喜子・阿部正史
鈴木雅史

▼**紫波地区会**（1名）照井英輝

▼**花巻地区**（6名）内田留美子
三浦建成・藤田聖子・小原賢
野里帝夫・東海林泰史

▼**遠野地区**（3名）髙橋淳・日影舘亨
佐々木誠

▼**北上・和賀地区**（9名）菅原純
小松由香里・菅原由香里・亀谷琢
菊池正寿・菅原文江・野里洋介
馬場美輝彦・佐藤克宏

▼**胆沢地区**（4名）髙橋秀和・松本圭
八木浩司・佐々木美穂

▼**江刺地区**（2名）阿部拓也
佐々木由香里

▼**一関西地区**（6名）小笠原浩・山村淳
栃内宏之・及川宇雄・佐藤紀夫
佐藤幸雄

▼**一関東地区**（6名）佐藤啓・藤川真人
佐々木伸・菊池弘明・眞島繁明
廣澤正紀

▼**気仙地区**（5名）大場江利子

スポット その178

岩手県高等学校副校長協議会　会長
理事　**亀山　丈氏**
（岩手県立盛岡第一高等学校　副校長）

亀山丈先生は、日本教育会岩手県支部理事の他に岩手県高等学校副校長協議会会長、全国副校長会理事等、多くの役職についております。

副校長として本校に赴任する前、県教育委員会事務局学校教育室に勤務されていたことから、教育行政に精通しています。そのため、県教育委員会からの様々な通知文書や照会は、手際よく担当部署に仕分けられ、的確に処理されています。

副校長協議会会長としては、コロナウイルス感染症の影響で集合型の会議や研修が行えない中にあっても、全国、東北、県内の各担当の先生方と電子メールで情報を整理し、いつの間にか処理されています。

忙しさを感じさせることなく様々な業務が処理されていく様子は、働き方改革が求められている今、まさに理想的な姿なのではないでしょうか。

（副校長　和田　健利）

渡辺信子・千葉憲一・渡辺浩公
佐藤拓巳

▼**釜石地区**（4名）市村かおり
佐藤一成・八木澤江利子・佃拓生

▼**宮古地区**（9名）山火敏幸・千田淳
鷹嘴三和・千葉康祐・冨澤広子
石川修司・佐々木雅史・杉下奈津子
高橋敦

▼**下北地区**（3名）吉田浩規
三浦紀久果・山下一幸

▼**九戸地区**（9名）浅利宏光・菅崎晋
久保田純子・馬場宣彦・村上貴彦
木村亮・千田博之・村上淳・菊池良弥

▼**二戸地区**（11名）本宮真樹
菊池真理子・佐々木伸也・佐々木康隆
髙橋雄賢・遠藤暢睦・吉田智
齋藤秀一・岡田幸一・佐々木由貴子
永本一志

（計91名）

◇**小学校・中学校副校長会**

▼**盛岡地区**（10名）
五安城正敏・大野誠・熊谷純
堀井秀郷・小野甚市・田村大樹
黒坂太一・西條淳・三河不二夫
浅野倫子

▼**岩手地区**（8名）片方元昭
工藤ゆかり・及川公子・瀧澤紀子
千田満代・大友一篤・志賀誠
坂本琢磨

▼**紫波地区会**（2名）馬場ひとみ
今川晋

▼**花巻地区**（1名）菊地正則

▼**北上和賀地区**（8名）米晶子
渡邊隆子・菊池千佳・清水武彦
軽石さゆり・澤田真一・大内真理子
苫米地俊亮

▼**胆沢地区**（6名）髙橋智也・澤柳直子
小椋孝史・佐々木正義・竹林直美
阿部伸泰

▼**江刺地区**（3名）鈴木克哉・小村正人
山本千和子

▼**一関西地区**（13名）馬場直幸
菊池睦子・髙橋聡子・白川太一
梁瀬太志・似内織江・吉田正樹
坂本幸治・小田島真弓・田代司
田口ひろみ・中島早苗・野田満哉

▼**一関東地区**（5名）菊地綾子
伊東裕美・菊地由紀美・菊池啓志
菅野太郎

▼**気仙地区**（2名）戸羽正和・岩渕尚仁

▼**釜石地区**（4名）今野英行
今津みどり・佐々木良一・佐藤伸子

▼**宮古地区**（7名）星健也・菊池知之
熊谷大輔・佐藤知・佐々木俊
早川貴之・上村佳那

▼**下北地区**（3名）鈴木恵・千葉亮子
熊谷宏志

▼**九戸地区**（7名）所慎一郎・北川儀子
沢田幸宏・小原和弘・福井直子
軽石邦子・奥秀樹

▼**二戸地区**（12名）佐藤裕子・及川芳昭
八重樫泰規・高久和則・小田島尚子
三浦久寿・橋場美和・田中雅隆
吉田淳子・千葉道宏・菊池文孝
大道篤史

（計91名）

今回は（公財）岩手育英奨学会への助成金1万円の御寄附を頂いた、令和4年度新任の岩手県小学校長会、中学校長会と、同じく（公財）岩手育英奨学会への助成金1万円及び教育振興基金5千円の御寄附を頂いた、令和4年度新任の岩手県小中学校副校長会の正会員の方々をご紹介させて頂きました。貴重なお志をお寄せ頂き、多額のご支援・ご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

飛躍の秘密を探る その7
北上市立上野中学校吹奏楽部

全日本吹奏楽コンクール全国大会で３度金賞
低音から高音まで一糸乱れぬ「上中サウンド」
練習は短時間で集中的に

近年、岩手県内の小・中・高等学校の合唱部や吹奏楽部などの文化活動のレベルが飛躍的に高まり、全国大会等の晴れの舞台での活躍が目立ってきています。素晴らしい成果が見られるようになったその秘密はどこにあるのでしょうか。第１回目は、今年、名古屋市で開催された全日本吹奏楽コンクールに東北代表として連続出場し、見事３度目の金賞を受賞しました。大会前の９月30日（金）に北上市立上野中学校吹奏楽部を訪問し、高橋亨校長先生や顧問の柿沢香織先生、部長の伊藤心菜（ここな）さんに日本教育会岩手県支部の髙橋ひさ子副支部長がインタビューをし、その秘密を探ってきました。（文中敬称略）

▼部活動が盛んな学校

◇髙橋　この度は、昨年に引き続き、全日本吹奏楽コンクールへの出場おめでとうございます。はじめに吹奏楽部の歴史についてお聞きします。

●髙橋校長　本校は昭和59年に北上中から分離独立し開校しました。今年で39年目を迎えます。吹奏楽部は創立当初から活動していたと聞いております。

北上市立上野中学校の校舎

●柿沢　私は平成22年度に本校に赴任し、それからずっと吹奏楽部を担当しています。初めて全国大会に出場したのは平成27年です。平成30年には岩手県では初めてとなる全国大会で「金賞」を頂き、令和３年に２度目の「金賞」を頂きました。

◇髙橋　部活動の在り方について校長先生はどうお考えですか。

●校長　部活動は、生徒の健全育成に大きくかかわる大事な活動だと思います。本校は吹奏楽部だけでなく、他の部活動も非常に盛んで校内には互いに頑張ろうとするよい雰囲気が溢れていると感じます。そこを支えている先生方の指導や頑張りに感謝しています。

◇髙橋　先生方の他に学校を支えている何か特徴的なことがありましたら。

●校長　地域の皆さんが学区にある黒沢尻北小学校と本校の様々な活動を温かく見守り応援してくれます。例えば全国大会出場には総額で数百万円の費用がかかりますが、多くの地域の方々から協賛会として支援頂いておりますし、市教委からは半額の補助を頂いております。そして保護者の大きな協力が常にあり、とてもありがたいと思います。

校長室でインタビュー

◇髙橋　コロナ禍の中、練習場所や時間の確保等苦労が多いことと思いますが。

●柿沢　練習時間は、平日は２時間のみで、土日のどちらかは休んでいます。練習場所は主に音楽室と廊下です。限られた時間で曲全

体を通して合奏するとあっという間に時間が過ぎてしまうので、コロナに関わらずもともと合奏にあまり時間を取らず、楽譜を細分化して練習をしています。「今日はこの人とこの人」というように重点的に指導を行い、そこをつないで一つの曲を作っていきます。

▼パート練習に重点

◇髙橋　細分化・重点化して確実にその箇所の表現を仕上げていく練習は、「飛躍の秘密」のように思いますが、その他に工夫されていることがありましたら。

●柿沢　主に少人数でのパート練習に重点を置いています。教師がついていなくても、自分たちで練習計画を立て、自主的によく練習をしています。その中で力が付き、「自分たちで部活をつくりあげていく意識」も生まれます。じりつ（自立・自律）した中学生に育って欲しいと願っています。他校の吹奏楽部もそうだと思いますが、私は、特に1年生を大事に育てています。運動部と異なり、1年生からレギュラーとして一緒にステージに立つわけですから、パート練習は上級生にとって大事な1年生を育てる責任もついてきます。下級生にはできるだけ練習時間を確保してほしいので係活動はすべて上級生が行います。

音楽室でのパート練習

第69回全日本吹奏楽コンクールで演奏
名古屋市国際会議場（2021/10/23）

●校長　パート練習を覗いてみると「ミニ柿沢先生がいっぱいいる」という印象があります。これまで培ってきた中身の濃い練習スタイルが豊かな表現を生み出す元になっているのではないでしょうか。

▼感謝・感動・笑顔が合言葉

◇髙橋　部長の伊藤心菜さん。全国大会に向けての気持ちを教えてください。

●伊藤　コロナの関係で思うように練習時間が取れなかったのですが、様々な方々のご支援を頂き、今は練習をすることができるようになったので、とても感謝しています。「低音から高音まで一糸乱れぬ上中サウンド」で最高の演奏が出来るようにと思っています。また、「感謝・感動・笑顔」を合言葉にして頑張ってきます。私はトランペットを担当していますが、課題曲の情感豊かなハーモニー、自由曲のスピード感を大事に演奏したいと思います。

教室や廊下の片隅でパート練習

◇髙橋　これからの夢や目標を聞かせてください。

●伊藤　私達が創り上げてきた「上中サウンド」を伝統として次から次へとつないでいって欲しいと願っています。

◇髙橋　これからの益々の御活躍を期待しております。今日は有難うございました。

インタビューを終えて

インタビューを終えた後、放課後の練習を拝見させて頂きました。各パートに分かれての練習では、ピッチや技能、表現の確認などについて真剣な表情で取り組んでいました。アイコンタクト、身体の動き…呼吸を合わせ、音色を揃えて化学反応のように生まれる上中サウンドの秘密がそこにありました。

シリーズ 学校キラリ⑮

地域ともに歩む土淵小

遠野市立土淵小学校　校長　日影舘　亨

本校は、柳田国男の「遠野物語」の生みの親である民俗学者佐々木喜善の生まれ育った土地、土淵町にあります。遠野の文化や歴史を語りつぐ土壌があり、小学校に隣接している「伝承園」では「子ども語り部」として児童が昔話を披露しています。また、最近では土淵町で盛んな「ホップ栽培」を教育活動に取り入れ、総合的な学習の時間にホップ学習に取り組んでいます。そこで今回は、「子ども語り部」と「ホップ学習」について紹介します。

一　伝承活動「子ども語り部」

本校の特色の一つである子ども語り部活動は、今年度で25年目となります。郷土に伝わる民話を知るとともに、地域の文化を学び、意欲的に伝承していこうとする心情を育むことを目標に取り組んでいる活動です。

学年毎に必修演目を定め、全校児童が1年間に1話以上の習得を目指し、地域の語り部の方に協力をいただきながら練習に取り組んでいます。卒業までに一人6話以上を覚えることを目標としています。児童は習得した民話を、毎週末行われる伝承園での昔語りや土淵まつり、喜善祭、学習発表会等で披露します。また、外部からの来校者へ披露することもあります。

コロナ禍のため、現在は発表の機会は限られていますが、土淵小の伝統を継承するため、児童は熱心に語り部活動に励んでいます。

ポップ和紙の材料となるホップ蔓を回収する児童

二　ホップ栽培から学ぶ

本校では総合的な学習の時間において、土淵町の特産品であるホップについて、見学・栽培・加工等の活動を通して系統的・計画的に学びを深めています。5年生は、地域のホップ農家の指導の下、ホップを栽培し、収穫したホップを地域で収穫されたホップと一緒に仙台のビール工場に出荷しています。また、収穫したホップを使って、遠野緑峰高等学校の生徒さんの協力を得ながらホップを食材にした料理作りにも挑戦しています。6年生は、ホップが製品になるまでの過程を仙台のビール工場の見学等を通して学びます。また、遠野緑峰高等学校の生徒さんの協力を得ながら卒業証書用のホップ和紙作りにも挑戦しています。

今回紹介した取組は地域の協力なしでは難しい取組であります。コロナ禍という厳しい状況ではありますが、今後も土淵小だからこそ「できる」教育、土淵小だからこそ「やるべき」教育を地域とともに進めてまいりたいと思います。

山寺の鐘

過日、盛岡市中央公民館主催の公開講座東北大学特任准教授佐藤克唯毅氏の「未来はこんなに面白い」を聞く機会があった。ベンチャー企業の現状等々から、AI等を駆使した近未来社会、これからの子どもたちが生きる未来社会を垣間見たような、極めてユニークで面白い講義だった▼国の施策により学校でも情報機器の活用が広まり、コロナ禍でのリモートによる授業等、機器活用が一気に促進された感がある。高度情報化社会が急速に進み、想定外のことも次々起こる。加えてコロナ禍である。学校の有り様は大きく変化し、これまでとは全く別次元の対応を余儀なくされている。にもかかわらず、先生方の真摯な対応には頭が下がる▼時代とともに、学校にはさまざまなことが求められる。近未来の子どもたちは情報機器を当たり前のツールとして使いこなすようになるであろう。ただ、学校教育の原点はいうまでもなく人格の陶冶、人間性の育成にある。時代が大きなうねりの中にある時こそ、原点を忘れてはならない。（英）